

城巡りで日本の心に触れ

編集委員

インタビュー

武庫川女子大准教授 古野 貢さん(48)に聞く

ブームはいつまで続きますか？

全国的な「城ブーム」が続いている。竹田城跡(朝来市)の観光客は10年ほどで約20倍、姫路城は2015年度過去最多の入城者を記録した。各地で築城400年イベントが展開され、戦国テーマの大河ドラマ放映が続く。城巡りが目的の外国人客も増加しているという。城の話題は事欠かないが、ブームの背景に何があるのか。日本中世史が専門で、城の歴史などに詳しい武庫川女子大の古野貢准教授に聞いた。(武田良彦)

「城ブームをどう見る。」

「多様な趣味、趣向が認められる社会になってきたことが根底にあると思う。戦国武将や城跡などが好きな女性は『歴史女』と呼ばれ、刀が好きなら『刀剣女子』。『城が大好き』と公言して隠す必要もない。そのような若い女性たちが城巡りをし、城内の歴史館に入る。かつてなら『変わった趣味』とか否定的に見られたのでは。」

「有名人と言えなかった各地の城の再評価が進んだことも大きい。城の研究者が増え調査が進んだ。自分の地域の城の美像が分かる、かつてない愛着を感じ、地域の活性化に結び付ける意識も芽生えてくる。さらに、地元の城をきっかけに、他の城に関心が及ぶ。ネット検索で全国の城情報は簡単に得られ、行ってみたいくなる。」

「各地の築城400年イベントがブームの大きな要因では。」「要因の一つだとは思いますが、そもそも、厳密な築城年代が分かる城は数少ない。戦国時代の終焉と江戸時代の始まりから400年という時期に合わせたブームに乗ってイベントをしているのでは。」

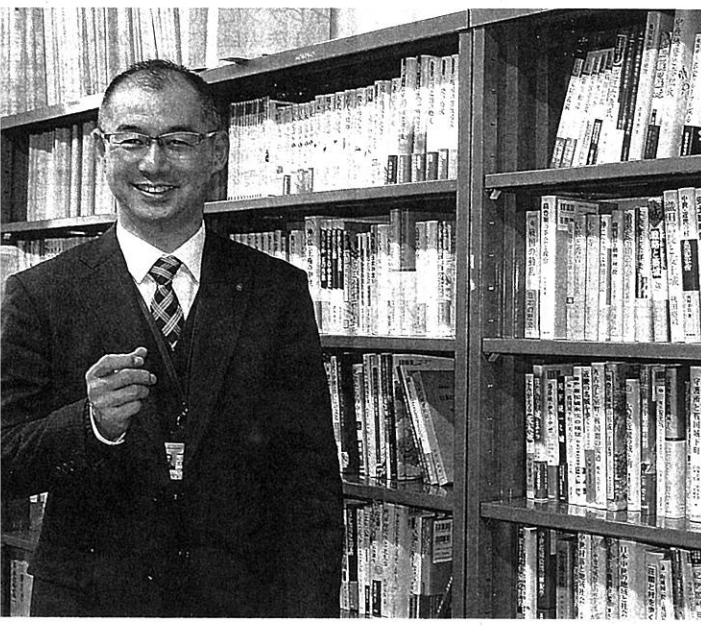
ふるの・みつき 1966年、岡山県生まれ。大阪府立大学大学院博士課程前期退学。博士(文学)。2012年、武庫川女子大へ。15年から現職。著書に「中世後期細川氏の権力構造」など。

「過去にも戦国をテーマにした番組が何度も放映された。が、それがきっかけで現在のようなブームは起きなかった。影響は皆無ではないが、現在の城ブームは、多くの要因が重なり合って生まれたと見るべきだろう。」

「城ファンが多い年齢層は。」「城をテーマにした市民の講座も担当し、各地の城も案内した。体験から言うと、高齢の方が多い。若い頃、趣味の実現が難しく、『退職後に城巡りしてみたかった』といった人が目立つ。単に、歴史や構造を知りたいということだけ

ではなく、ハイキングや写真撮影といった要素も期待しているのではないかと。」「外国人の城巡りも増えた。」「日本人の心を理解するキーワードとして『武士道』『忍者』などが想定される。そのルーツが城にあると考えているのかもしれない。また、母国のキャッスル、モスクといった象徴的な建物と比較し、その違い、珍しさが関心と呼ぶのではと推測している。西洋は石の文化であり、東洋でも木の巨大で古い建築物は珍しい。城が木造建築であることにも興味をかき

ではなく、ハイキングや写真撮影といった要素も期待しているのではないかと。」「外国人の城巡りも増えた。」「日本人の心を理解するキーワードとして『武士道』『忍者』などが想定される。そのルーツが城にあると考えているのかもしれない。また、母国のキャッスル、モスクといった象徴的な建物と比較し、その違い、珍しさが関心と呼ぶのではと推測している。西洋は石の文化であり、東洋でも木の巨大で古い建築物は珍しい。城が木造建築であることにも興味をかき



西宮市、武庫川女子大

遺構再評価で高まる関心

記者のひとこと

戦国時代や、建築物としての城の研究者は数多い。ただ「ブームの背景」を知る「事情通」を探るのは難しかった。数々の城下町調査や市民講座を担当してきた古野さんの話に、わが意を得たりの思いがした。

立てられるのではないかと。

「城ブームは今後も続くのか。」「続くと思えば、関心は本物の城へ向かうはずだ。ただ、多くの本物や遺構は取り壊され数少ない。現実には街の中の一角に『かつてそこに存在した』ということになる。そこで興味が尽きる人と、詳しく調べて復元を志すなど、思い入れが増す人に分かれる。」

「尼崎市北部に富松城という阪神間では数少ない土塁を残す城館遺構がある。天守があるような城ではないが、地元の人が地域の拠点、歴史遺産としての魅力を伝える『まちづくり委員会』を結成し熱心な活動を続けている。このような地域色の強い取り組みは続くだろう。一方で、城の築城記念イベントなども一段落し、有名な城を巡る観光客は下降線をたどる可能性もある。」

「日本の城はなぜ、これほど愛されるのか。」「戦国時代の施設としての城は、世界各国にあるが、日本の城は、日本をより強く意識させられる構造物だからではないか。それが、より身近な存在であればあるほど、自己同一性や愛着が増す。」

「お薦めの城があれば。」「安土城、伊賀上野城、瀬戸内海の能島城(愛媛県)、それに置塩城(姫路市)など。置塩城は赤松氏の拠点で、山頂部が広い大規模な山城。守護赤松氏の威厳が感じられる。素晴らしい。」

編集委員 武藤邦生

あ・ん

友人にしてライバル

が入り垂れやがで、サゲ(落ち)もしやれている。けれど昔の花街の雰囲気が出るはずもなく、それなりにしてしまっただ。古い上方落語の「親子茶屋」である。桂米朝さん(1925~2015年)が、三代目桂春団治さん(1930~2016年)にネタを伝えるため書き起こした原稿が見つかり、兵庫県立歴史博物館(姫路市)で開催中の特別展「人間国宝・桂米朝とその時代」で展覧されている。親子茶屋は、米朝さんの師匠四代目桂米団治の十八番。入門後ほどなく稽古を受けたのだろうが、若き米朝さんのネタ帳にも2番目に記されている。テレビで最初に演じたのも、親子茶屋だった。その大切なネタを、ともに上方落語の復興を目指す盟友に伝えた。

ただし、譲ったわけではなかった。米朝さんは、40~50歳代と60歳代に全集を録音しているが、そのどちらにも親子茶屋は収められていない。独演会でもたびたび取り上げた。あらためて2人の録音を聞き比べる。米朝さんびいきの僕としては、好みはやはり米朝さんだが、春団治さんの上方の料を極めた名演も捨てがたい。友人にしてライバル。今になって見ると、その原稿は、生涯続く2人の関係を予言していたように思える。8枚の原稿用紙は、升目にとられず、細かい字でびっしりと埋め尽くされている。その文字を追ううち、いつの間にかネタが口をついてきた。もう一度やってみようか。いや、やっぱりムリかな。